待降節・アドベントⅠ礼拝
２０２２年１１月２７日（日）
題　「 神の愛を伝えるために　」
テキスト：ルカによる福音書４章１４～２１節

皆さん、おはようございます。
ローソクに１本火が灯り、教会の暦では、今日からアドベント・待降節に入りました。アドベントは、イエス・キリストの誕生を待ち臨みつつすごす時です。アドベントと言う言葉は、「到来」という意味のラテン語で「待降節」と訳されます。クリスマス前の４週間、心の準備をする時で、またキリストが再び来られること（再臨）を、喜びをもって、待望する季節にもあたります。
再臨とは理解しにくい言葉ですが、イエス・キリストが再び来られることを意味する言葉で、古代のキリスト者たちは、神さまの救いの約束とその働きが世界と宇宙全体に完全に実現する時であると信じて、その日を待ち望みつつ希望に生きたのです。古代のキリスト者たちは「マラナ　タ」（主よ　来てください。）との祈りを大切にしていました。
実はこのアドベントは教会の暦では１年の始まりにあたります。１１月３０日に最も近い日曜日から始まります。新しい年もこのクリスマスの光の中で迎えることとなるのです。　クリスマスの期間は１月６日まで続きますが、この日はエピファニー（公現日）と呼ばれます。この日は、東方の３人の博士がお生まれになったイエスさまを訪問した日とされています。

さて、今日の聖書の個所には、イエスが神の言葉と愛を伝える伝道を開始された場面が記されています。
イエスは、およそ３０歳の時に、ユダヤのガリラヤ地方で伝道を開始されたと伝えられています。
◆ガリラヤで伝道を始める
14:イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。
霊とは、神ご自身であり「いのちの息」とも言われます。その神の力によって働きを行って行かれたのです。イエスさまの病気の人々の癒しや慰めの愛の言葉による働きがその地方一帯に評判となって行ったのです。
イエスは、約２０００年前のユダヤ教会堂で人々を教えらました。ユダヤ教の会堂は、シナゴーグと言われ、今日で言えば土曜日に村人たちが集まって神に礼拝を捧げていました。これは旧約聖書の最初の書物である創世記の教えに由

来しています。「15:イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。」とあります。

活動を続ける中でイエスは、幼い時から育った故郷の町ナザレに帰られました。その時のことが今日の聖書の個所に記されています。今日の聖書個所の小見出しには、「◆ナザレで受け入れられない」と、かなりショッキングな見出しがつけられています。イエスは母マリア、父ヨセフの子として、兄弟姉妹の長男としてナザレで育ち３０歳まで暮らした、と伝えられています。父ヨセフの仕事は大工でした。それを手伝っていたようです。ヨセフは早くに他界したようで、その後はイエスが長男として母マリアを助け家を支える柱として家計を支えていたのだと思えます。

さて、久しぶりに故郷ナザレに帰って来たイエスは礼拝に参加されました。

16:イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。

当時の地方の町・村の礼拝では、参加した人たちの中から当日の聖書を伝える役の人が選ばれたようです。この日は、久しぶりに帰って来た噂のイエスが選ばれたのだと思わされます。

私はこの場面を読んでいまして、昔テレビで観た現在のユダヤ教の礼拝の場面を思い出しました。会堂の前面に講壇があり、その前に聖書をしまって置く柵のようなものがありました。祭司のような服を来た人が棚から聖書、ユダヤ教ですから旧約聖書ですが、元来聖書は今日のような表紙のある本のような形ではなく、巻物なのです。そう言えば聖書を読んでいても「巻物」という言葉が出て来ます。その人は、その神の言葉が記された文字か記されているその巻物を両手に抱え込んで、あたかも生まれたての赤ちゃんを大切に抱え込むかのように抱いて運ぶのです。わたしは、この姿に心動かされました。また教えられました。本来、聖書は自分の胸に抱き抱えるように、愛おしむように心に刻むのだということを。人間の「所作」、身の動きは、大切な内容を形として伝えていることがあるものです。その意味で、言葉と態度は大切だと思えます。

この時、読まれた聖書の言葉が記されています。

17:預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目に留まった。

18:「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、

19:主の恵みの年を告げるためである。」
20:イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。

この時、イエスが読まれた聖書個所は旧約聖書のイザヤ書６１章１節そして２節のことばでした。（p.1162）
この聖書個所はまさにイエス御自身の姿です。主の霊、神さまの力と息が注がれておられる方が地上に誕生された主イエス・キリストなのです。
「貧しい人に福音を告げ知らせるために、」「貧しい人」とは、「頼る者なく、心細く、オロオロと生きるしかない者」とも訳されています。
神の子イエスはそのような人たち、頼る者なく、心細く、オロオロと生きるしかない者たちのためにこの世に来てくださった方なのです。主なる神に油を注がれた方、メシアです。その働きは、心身が捕らわれている人に解放を、目の見えない人に 視力の回復を告げ、病気の人々を癒してくださる。圧迫されている人を自由にしてくださる。イエスは失った人間性を回復させるために天の神の元から地の低みへと来てくださった方なのです。それは聖書にある神の恵みの出来事です。「19:主の恵みの年を告げるためである。」とある通りです。「主の恵みの年」とは、元来、旧約聖書では「ヨベルの年」と言われ、すべてのものが元に戻る年、リセセットされる年なのです。５０年ごとに、金銭や土地などを借りて苦しみの中を生きていた貧しい人たちが解放されるという決りがあったのです。自由にされ解放される喜びの年なのです。

さてイエスが巻物を帰すと、会堂中の人々の視線がイエスに注がれました。イエスは、そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳したとき、実現した」と話し始められたのです。
イエスが地上に来られて人々の中を生きて行かれ神の愛が地上に実現して行ったのです。つまり、旧約聖書の救いの約束の預言は、独り子イエスによって実現したということです。
後のキリスト者と主の教会はそれを信じた、信じるのです。わたしもそのことを信じます。その時、わたしたちは教会はイエスの後に従っていることになるのです。喜びと苦難を分かち合うことで神の愛とイエス・キリストの愛はわたしたちの中に地上に広がって行くのです。

しかし、その時会堂にいた人たちの中には、イエスを神からの使者と信じた人たちもいましたが、それを拒んだ人たちもいたことが記されています。

イエスが奇跡を行うことだけを見たいと思っていた人たちやイエスの語る
ことばに反感を持った人たちは、イエスを町が建っている崖まで連れて行き、
そこから突き落とそうとしたのです。
ご存知のようにイエスを受けいれる人たち、イエスの言葉と行いに反感を持つ
　人たちは今で
もこの社会や世界にはいるのです。その主な原因は、特に自分たちが持っている地位や特権が奪われそうになる時に現れてくるのです。これは誰の中にもある人間のエゴイズム、自己中心、の罪ゆえだと思えます。このことは決して他人ごとではないことを思います。しかし、愛なる神さまはそのことを百も承知の上で愛する独り子イエスを人類の救い、世界の救いのために送ってくださったのです。イエスは神の子として十字架につき、わたしたち人間の罪を担ってくださったのです。この御子イエスの十字架に救いがあるのです。それが私たちの救いなのです。
わたしたちは今日から始まるアドベントの日々、神の御子イエスの十字架の愛を心に灯して歩みたいと思うのです。
　主の平安を祈ります。